

勝五郎生まれ変わり物語

文政5年（1822）、中野村に住んでいた8歳の勝五郎は「自分の前世は程久保村（東京都日野市程久保）の藤蔵だ」と語り、生まれ変わりの少年として村中の話題になった。藤蔵は文化2年（1805）に生まれ、同7年（1810）2月4日に疱瘡のため6歳で亡くなった少年である。

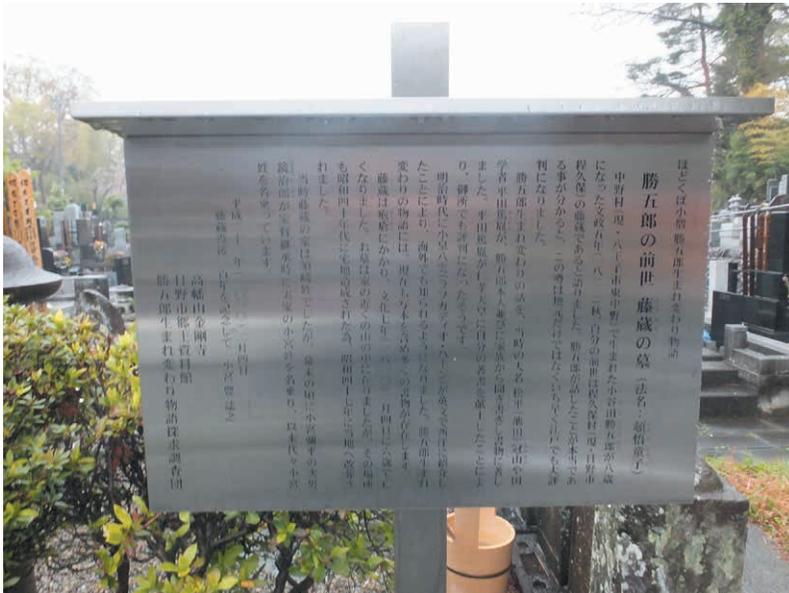
祖母と共に歩いたことのないはずの道を迷うことなく進み、程久保村の藤蔵の家にとどり着いた勝五郎は、藤蔵の家のことや、近所のことを詳しく話して周りの人々を驚かせた。

このことは江戸まで伝わり、文人大名として知られていた因幡若桜藩主の池田冠山や、国学者の平田篤胤が聞き取った話は書物として残されている。

また、明治30年（1897）小泉八雲による随想集『仏の畠の落穂』に収められた「勝五郎の転生」によって、海外の人々にも認知され、その英訳を目にしたアメリカのイアン・スティーブソン氏は、1960年発表の論文「前世の記憶とされるものによる死後生存の証拠」においてこの物語を取り上げ、後にバージニア大学医学部知覚研究室の開設へとつながることとなった。



現宗研では令和元年（2019）5月、「勝五郎生まれ変わり物語探求調査団」の北村澄江氏にご同行いただき、生家や墓地など物語の縁の場所をめぐり、毎月行われている同調査団の例会に参加した。この調査団は2006年に日野市郷土資料館が核となって発足し、物語の調査研究および啓蒙活動を続けている。メンバーには研究者だけでなく、藤蔵・勝五郎の子孫が加わり、20代～80代まで幅広い年齢層の人が関心を持って活動に参加している。



北村氏によると、調査団の発足当初は近隣の人々でさえ広く認知されていたとは言い難い状況であったが、夏休み子ども講座や講演会など、調査団の地道な活動により多くの人に物語が知られるようになったとのこと。

そして、その成果は地域振興にも様々な影響を及ぼしている。例えば、多摩都市モノレールの程久保駅ホームには、2019年に『「ほどくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語」ゆかりの地』として紹介のイラストが掲載された。また、藤蔵の墓が残る高幡不動脇の和菓子店では「ほどくぼ小僧まんじゅう」が販売され、名物となっている。

生まれ変わりについて考えるとともに、地域の歴史を掘り起こすことで活性化へとつながった事例という視点から、興味を持ってこの物語に触れていただくことを願っている。